

内陸避難者が集う場の実態把握と果たす役割についての考察ー東日本大震災における岩手県のケーススタディー

著者	富安 亮輔
著者別名	TOMIYASU Ryosuke
雑誌名	工業技術
巻	38
ページ	55-58
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009541/



内陸避難者が集う場の実態把握と果たす役割についての考察
-東日本大震災における岩手県のケーススタディ-

A Study on Places Where Victims Gather in the Undamaged City of Iwate Prefecture

富安亮輔*

1. はじめに

公共施設やインフラなどを整備・復旧しても、生活する人がいなければ被災地の復興とは言えない。そのため行政は「可能な限り現地復興を」と懸命になり、人口が減らないように施策を講じる。仮設住宅や災害公営住宅の入居に関して、当該市町村外からの申し込みに対し優先度が低いことがその例である。まちづくりという大きな視点に立てば筆者もこの姿勢に賛成である。しかし、被災者ひとりひとりの立場に立てば、「多少の不便があっても慣れ親しんだ地域で生活したい」という決断と同じように「別の市町村に移る」ことを決めた理由や心情も理解できる。

東日本大震災では、復興庁が毎月の都道府県別避難者数を発表している。その資料によると、2014年12月時点で54,197人が東北三県（福島、宮城、岩手）から県外へ避難している^{*1}。原発事故を伴う福島県については、県内避難者でもその多くが震災前に住んでいた地域を離れていることから、現在、市町村を越えた避難者が少なくとも6万人以上いると考えられる。また、この数字

は仮設住宅やみなし仮設住宅の居住者という行政が把握できる人数であって、住宅を新築・購入した者は制度の上では生活再建したとみなされるため含まれていない。例えば「釜石市の仮設住宅を退去して息子家族と一緒に盛岡市に戸建て住宅を購入した」という高齢者も「別の市町村に移る」ことを決断したといえる。そのためタイトルにある“避難者”には恒久的な住まいへの移住者も含んでいる。そして、“内陸”とは「沿岸＝被害が甚大な市町村」、「内陸＝被害を受けていない市町村」が成り立つ岩手県を想定したものである^{*2}。仙台平野が広がる宮城県や原発災害を抱える福島県についてはこれらが当てはめにくいかもしれない。しかし、震災が契機となって顔見知りが少ない地域へ移り住んだ方々がいることは共通していると言えよう。

岩手県では沿岸の仮設住宅団地の集会所と同じように、避難者が集まることができる場所が内陸市町村ごとにいくつか設けられている。本稿ではこれらの事例を紹介し、避難者が集う場の役割を考察することとする^{*3}。

表1 避難者が集う場の概要

自治体名	名称	開所時期	開所時間	運営団体	立地	施設整備	運営資金	実施イベント	利用者数
盛岡市	もりおか復興支援センター	2011.7.11	火～日 9:00～18:00	一般社団法人 SAVE IWATE	盛岡駅から徒歩20分、市庁舎や県庁舎等の官庁街に立地	既存建物の1階と2階を改修	緊急雇用創出事業	週に1回程度同郷者ごとのサロン、手芸、折り紙、囲碁等のサークル活動	サロンには平均20人/回
北上市	きたかみ震災復興ステーション	2011.9.1	月～金 9:00～17:00	きたかみ復興支援協働体	北上駅から徒歩2分、北上駅西口の市街地に立地	空き店舗を改修	新しい公共の場づくりのためのモデル事業等	週に1,2回程度、同郷者ごとや趣味等のテーマごとのサロン、定期的なサークル活動を開催	約150人/月 (サロンには平均9人/回)
花巻市	ゆいっこカフェ	2012.10.9	月～金 10:00～15:00	ゆいっこ花巻	花巻駅から徒歩7分、古い商店街の一角に立地	空き店舗を改修	赤い羽根共同募金などの助成団体からの助成	常時カフェを運営 週に1,2回程度、様々な場所で食事会や季節のイベントを開催	カフェには平均3人/日
遠野市	希望の郷「絆」コミュニティサポートセンター	2011.10.1	毎日 9:00～17:00	遠野市と社会福祉協議会	遠野駅から徒歩10分、市街地にある仮設団地内に併設	木造の仮設建築物で新築	地域支え合い体制づくり事業 生活福祉資金貸付事業（社協の生活支援員配置）	週に4回程度、書道や手芸などのサークル活動、お茶っこ、健康相談会を開催	イベントには平均10人/回
奥州市	ホーププラザ奥州	2012.7.1	月～土 10:00～17:00	NPO法人復興支援奥州ネット	水沢駅から徒歩7分、商業施設「メイプル」の地下階	商業施設の空きスペースを改修	地域支え合い体制づくり事業 被災者生活支援事業 みやぎ地域復興支援助成金	週に3,4回程度、手芸等の自主サークルや同郷者ごとのサロン、パソコン研修等を開催	約200人/月

*理工学部 建築学科

2. 盛岡市のもりおか復興支援センターと

花巻市のゆいっこカフェ

筆者らのこれまでの調査によると、岩手県の内陸市町村のうち沿岸からの避難世帯数が100世帯以上を超えたのは盛岡市、一関市、北上市、花巻市、遠野市、奥州市、滝沢村、住田町である。これらのうち、一関市・遠野市・住田町には仮設住宅と集会所が建設され、盛岡市・北上市^{※1}・花巻市・奥州市には既存建物を改修して避難者が集う場が設けられた(表1)。

2011年3月の避難所利用者数が約4,000人に上った盛岡市では、発災直後から災害の大きさ故に沿岸から盛岡市へ大勢の人が避難してくると想像でき、避難所が閉鎖した後も避難者が集えるような場が必要だという認識が、行政職員の間にあったという。即座に場所や運営者の手配に動き、7月11日に“もりおか復興支援センター”が開設された(図1, 2)。現場担当者は「4月以降、民間賃貸住宅をみなし仮設住宅として続々と沿岸から人が移ってきた。これに合わせてもっと早く開設すべきだった。」と反省する一方で、「予算確保に苦労した。緊急雇用創出事業を活用したが、あのタイミングでは他に選択肢がなかった。」という意見も聞かれた。“もりおか復興支援センター”が入居している建物は市庁舎前に位置し、偶然にも空いていた。これを改修し、1階に運営者の事務スペースや応接スペース、2階にはお茶会や音楽会のためのイベントスペース、裁縫などを行う活動スペースが設けられている。週に1度のペースでサロンや手芸などのサークル活動が開かれており、毎回20名ほどが参加する。勿論、イベントがなくとも訪れて自由に時間を過ごす避難者もいる。

花巻市の“ゆいっこカフェ”は、空きテナントを改修したこじんまりとした場所で、商店街の一角にある(図3, 4)。震災後から支援物資の仕分けや配送、ボランティアの活動支援などをおこなっていた花巻市の任意団体によって、2012年10月に開設された。民間の団体が支援活動を通じて、避難者が集う場所の必要性に気づき設けられた場所であり、経緯は盛岡市と異なる。運営経費も多くは民間の助成団体から支援を受けており、改修も



図1 もりおか復興支援センターの外観。市中心部の官庁街にある



図2 もりおか復興支援センターの内観。月に一度催される誕生会



図3 ゆいっこカフェの外観。商店街の一角にある

必要最小限となっている。小奇麗で敷居の高いカフェというより、店先で気軽にお茶と会話を楽しむことができる親近感が湧く場所である。活動内容は、“もりおか復興支援センター”と同じくサロンやサークル活動である。活動当初、運営者は地元の人々ばかりであったが、カフェの切り盛りや団体の運営に関わる避難者もいて、支援する側とされる側という関係を脱していると感じた。



図4 ゆいっこカフェの内観。お茶を飲みながらの会話が終わり、皆で片付けている様子

3. 避難者が集う場の意義

“もりおか復興支援センター”と“ゆいっこカフェ”を訪れていた避難者に、訪れる理由や評価する点を聞いた(表2)。得られたコメントから避難者が集う場の意義について考察してみたい。

「いろんな人と話ができるから良い」や「ここに来て友達ができた」などのコメントから新たな友人をつくり会話や交流を楽しむ場であることが分かる。さらに詳細に聞くと、「大槌町の人と会える、ほっとする。訛りが聞けるのがいい。大槌町に帰ったような気がする」や「津波で家を流されたという同じ境遇の人同士で会話できることが嬉しい。」、沿岸から避難してきた同じ境遇の人に心を許している。前居住地で震災前のような生活を送りたいが、それが叶わず葛藤を抱えたまま内陸に来ているため、交わされる訛りによって沿岸にいるような錯覚が震災という辛い経験に穏やかさをもたらしめていると考えられる。

もう一点は、「家にいるより楽しい、家にいるとやることがない」や「沿岸から来て行くところがない、どこに行ったらいいのかわからない。もしこの場所がなかったらいいのかわからない。もしこの場所がなかったらいいのかわからない。もしこの場所がなかったらいいのかわからない。」

表2 避難者が集う場の利用者が高評価する理由やコメント

No.	性別	年齢	前居住地 市町村	コメント
盛1	女	70代	釜石市	ここに来れば友達もできる、家にいるより話ができる。
盛2	女	80代	大槌町	大槌町の人と会える、ほっとする。訛りが聞けるのがいい。大槌町に帰ったような気がする。
盛3	女	60代	釜石市	釜石市出身なので肩身が狭いが、その中でも参加者の中に古い知り合いがいる。
盛4	男	70代	大槌町	大槌町の情報が入る、大槌町の人と会話できる。お茶つこの後、気の合う人たちとカラオケに行くこともある
盛5	女	80代	大槌町	保健師さんが血圧を測ってくれる。スタッフがイベント開催の準備を助けてくれる。この場所がないとお喋りが出来る場所は喫茶店等に限られ、話相手も既知の友人に限られる。
北1	女	70代	未回答	津波で家を流されたという同じ境遇の人同士で会話できることが嬉しい。ここに来れば誰かと話せる。趣味が同じ人と話せる。そうでないとアパートでひとりだから。
奥1	女	60代	陸前高田市	沿岸から来て、普段の生活の中で行くところがない。どこに行ったらいいのかわからない。もしなかったら家に籠って外に出ない。家族以外に知り合いがいない状況。顔見知りができる。陸前高田市の人とも出会える。ここに来て「あー今日も喋った、笑った」と帰宅できることが嬉しい。
奥2	男	80代	陸前高田市	復興まで4.5年かかるので、奥州市で顔見知りが必要に感じた。当初のイベントでは暗い話ばかりだったが、3か月後くらいからやっと笑い声が聞こえるようになった。嬉しかった。人それぞれ状況が異なるので時間がかかるだろう。
花1	女	70代	大槌町	いろんな人と話ができるから良い。
花2	男	70代	大槌町	大槌町の人に会える、被災者の顔が見れる、話ができストレス解消。前居住ごとのグループ活動があるのが良い。
花3	女	60代	大槌町	ここは自分たちのことを理解してくれているから長時間居ても気を使わなくていい。他所ではちょっと気を使ってしまう。ここでは大槌だけでなく花巻の人と知り合いが広がる。ここは近所のお茶飲みと異なる。近すぎると言えない話もあるし、ここは良い距離感。
花4	女	30代	釜石市	ここに来て友達ができた
花5	女	60代	山田町	家にいるより楽しい。家にいるとやることがない。

たら家に籠って外に出ない」から分かったとおり、高齢者にとってはこのような場や催されるイベントが外出のきっかけになっている。例えば、“もりおか復興支援センター”で開かれた大槌町お茶っこの会は参加者の多くが高齢者であったが、綺麗なカーディガンにスカーフをした女性やハンカチーフをジャケットにさした男性などお洒落をした方が複数名いた。働いていない高齢者は内陸の知人や友人は限られ、住み慣れていないため地域に居場所を持たない。そのため自宅に閉じこもりがちになるが、月に数度でも外で人に会うという機会がハレとケを生み単純になりがちな生活にメリハリをもたらしていると考えられる。

以上のように前例がない中手探りで進められてきたが、避難者が集う場はある程度の有効性を確認することができた。将来の震災への教訓として、これらは良い事例としては引き継ぎたい。

一連の調査を実施する中で、筆者に「これらの場をいつ閉鎖するか？」という疑問が、ふと浮かんだ。この疑問を率直に打ち明けると、ある盛岡市の職員の方から「内陸市町村避難者向けみなし仮設住宅の制度が終わるときではなく、避難者ひとりひとりの心情として避難者から盛岡市民になった時です」と答えをいただいた。

謝辞

多忙の中、調査にご協力いただきました行政や運営の各担当者様、利用者の皆様に心より御礼申し上げます。本調査は公益財団法人大林財団の研究助成によって実施しました。

なお、本稿は参考文献1と2に加筆修正したものである。

注

※1 復興庁 HP「避難者数の推移」

(http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/20141226_hinansha_suii.pdf, 2015年1月20日閲覧)より。
記録が残っている中では2012年3月の72,892人が最大である。

※2 岩手県では沿岸中部から南部の市町村が津波により甚大な

被害を受けた。一方、あまり報道されないが内陸の市町村も揺れによる建物倒壊などの被害が相当数報告されている。

※3 2013年12月から2014年3月に行った調査結果を主としているが、その後も情報収集を適宜行っている。

※4 きたかみ震災復興ステーションは平成26年3月に閉鎖。

参考文献

- 1) 富安亮輔, 大月敏雄, 西出和彦: 内陸後方支援都市の被災者の居住支援に関する研究-東日本大震災における岩手県を事例として, 2014年度日本建築学会大会(近畿) 学術講演梗概集オーガナイズドセッション, E-1, pp. 37-40, 2014. 9
- 2) 富安亮輔: 内陸避難者が集う場(震災復興ブレイクスルー[®]), 建築雑誌 Vol. 130 No. 1670, 日本建築学会, pp. 44-45, 2015. 4